

第1434回（7月25日）

森林・食糧・燃料——ヒマラヤの事例  
を中心として——

水野正己

世界の屋根と呼ばれるヒマラヤでは、近年、森林の大幅な減少をみており、土壌流亡や急傾斜地崩壊などの環境劣化が進行している。また、その結果、ヒマラヤ山脈を源とする河川の下流域、特にベンガルデルタでは洪水が頻発し、国際的な環境問題を引き起こしている。そこで、ネパールでの実態調査をもとに、森林破壊に代表されるヒマラヤの環境問題を明らかにする。

ネパールは国土面積14.1万km<sup>2</sup>で、南アジアではインド、パキスタンに次いで第3位を占める。森林面積は僅か240万haで、人口1人当たりの森林面積も0.15haと少ない。また、1980～85年の森林減少率は21.8%とされているが、植林は1976～80年の平均で2,000ha/年でしかない。

ネパールの林野政策は、1956年の私有林国有化法に遡り、これによって立木の無秩序な伐採が禁止される一方、それ以前に各地で機能していた林野慣行が解体するという結果を招いた。そして、森林資源保護的な政策意図とは逆に、無秩序な伐採＝盗材が増加したといわれている。現在では、植林の拡大を意図して各種の分収林制度も取り入れられ、郡庁がこれを所管するようになっていく。

以上のことから、政策の意図とは別に、森林という資源がネパール国内で実際にどのように管理され、利用されているのか、そしてそれらが森林減少とどのように関連しているのか、といった問題が重要になってくる。

まず、政府レベルでの森林減少要因の認識をみると、その最大のものは生活・産業用エネルギー源としての薪の利用とされている。現在、ネパールのエネルギー需要の81%が薪によって賄われており、これに農業副産物（茎、穂軸、藁など）および家畜糞を加えると実に

95%に達する。

しかしながら、現地調査の結果、別の要因の重要性が明らかになった。

①森林はネパール農山村では多面的に利用されており、耕地（化）、薪、飼料、放牧地、緑肥、食料、民間薬、野生動物、材木、農具、生活用具の（材料）給源である。

②森林の減少は、農業生産性の傾向的低下として農民に認識されている。

③森林の減少は、耕地拡大、家畜飼料の採取、燃料採取の複合的な要因の結果であり、薪の利用が必ずしも最大の要因であるとはいえない。

④山村集落の中には、領土意識を強く保持する村があり、こうした村では森林資源が豊富であるにもかかわらず、森林の保全・管理慣行が存在している。

⑤薪採取は近年ますます重労働化してきているが、山村生活上の解決すべき問題（ニーズ）が多くあり、住民の燃料問題に対する優先度は第1位に上りにくい。

⑥薪消費、カマドの作成・管理は女性の領域とされており、また裸火の持つ多機能性を考慮しないカマドの改良には普及性がない。

以上のように、森林破壊は農山村の農業生産性と関連しており、燃料危機という一面的な理解は当たらない。ヒマラヤの森林減少＝環境問題の根底には、ヒマラヤ地域の農業開発・資源管理という課題があり、総合的な対策が必要となっている。